

NCS HOKKAIDO

Nature Conservation
Society of Hokkaido

2003年11月 NO.120

..... CONTENTS

チヨットひとこと.....江部 靖雄..... 2	北海道各地のニュース..... 6
日高横断道路の「中止」が決定 俵 浩三..... 3	あ・ら・か・る・と..... 8 寄贈図書・お知らせ
エゾシカによる植生破壊は誰の責任か？ 北原 理作..... 4	お知らせコーナー..... 9
昆虫好きの想い(2).....黒田 哲..... 5	活動日誌・要望書.....10



午前4時30分 台風10号の影響で増水した沙流川ビニールハウスは水の中 市川利美撮影

環境破壊型の公共事業のあり方を問う。

21世紀は環境の世紀といわれている。最大の環境破壊は戦争である。20世紀では考えられなかった、世界中で巻き起こった100万規模の反戦デモ、集会、平和の声を無視して、アメリカは「イラク戦争」を強行。それに追従する日本政府の態度は世界中から批判されている。一國覇権主義の横暴はいかなる大義を標榜しても断じて許されるものでない。またアメリカは世界の資源を収奪しようとして生物多様性条約を未批准であり、97年に開かれた地球温暖化防止京都会議で締結された京都議定書からも「国益」にそわないと離脱している。グローバルな地球環境破壊が進んでいる中で大国の責任は重大である。

目を転じて、北海道を思えば千歳川放水路、土幌高原道路の反対運動は道民の圧倒的な支援と私達の粘り強い闘いの結果中止となり、ポスト「土幌高原道路」として、20年近く事業が継続されていた日高横断道路も、3年有余の本格的に再構築された反対運動の結果この8月に中止となった。北海道の自然保護運動も、闘えば勝利の展望が開かれることが証明され、時代の変化を感じ大変喜んでいる。



北海道は自然に恵まれているといわれるが、国家プロジェクトとして相変わらずサンルダムや平取ダム計画事業が着々と進められている。人里はなれた山奥を走る大規模林道や開発道路、高規格幹線道路、都市間高速道路計画等々。また、ダムや堰等々行政の継続性のもとで進行している。国家財政は赤ちゃんも含めた国民一人あたり504万円の借金財政、北海道も道民一人あたり約90余万円の赤字財政で火の車である。財政再建の最大の障害が公共投資の肥大化にあると言われているが、いまこそ環境破壊とムダな公共事業の抜本的な見直しこそが求められている。

なぜ、国や行政は内部の自浄努力で見直せないのか。ストップできないのか。大規模公共事業の場合、事業計画段階から住民が参画し徹底した情報公開が貫かれる政策評価システムの確立こそ求められている。固い話になりゴメンナサイ。

(常務理事・札幌在住)

江
部
靖
雄

日高横断道路の「中止」が決定

会 長 俵 浩三

日高横断道路（道道静内中札内線）は、本年2月に堀達也知事（当時）が「凍結」を表明したことを受け、北海道開発局長も開発道路部分の再評価を進めてきましたが、本年8月に「中止」を決定しました。これで日高横断道路は完全中止となりました。

日高横断道路をご承知のように、1本の道路のうち開発道路部分を北海道開発局が、それ以外の部分を北海道が分担して整備するもので、1984年に着工しましたが、険しい地形と崩れやすい地質に阻まれ、十数年をへても半分もできず、完成のメドが立ちませんでした。そこで1998～99年に開発局と北海道はともに再評価を実施しましたが、その結果、双方とも「事業継続」としたのです。

ところが北海道自然保護協会が再評価の中身を検証してみると、あまりにも不合理で矛盾に満ちた再評価なので、2000年2月以来、抜本的な再評価のやり直しを求め、8回にわたって知事と文書による質疑応答をくり返し、知事が説明不能となるまで追求しました。最大の問題点は、行政が過去20年間、日高横断道路は日高（道央）と十勝（道東）を結ぶ「広域幹線道路」と道民に説明してきたにもかかわらず、これは非公式な内部運用で、公式な開発道路指定理由は沿線の「農林業の資源開発」となっている「二重帳簿方式の公共事業」だったことが露呈し、しかも日高横断道路を建設しても資源開発には役立たないことが明白となったことです。'02年5月には「止めよう日高横断道路全国連絡会」が結成され、反対運動がいつそう強力なものとなり、全国規模での反対署名も開始されました。

そうしたことが契機となり、また厳しい財政事情も手伝って、'02年6月に知事が「見直し」を表明したのです。それが「凍結」「中止」に連なるのですが、行政は、開発道路としての日高横断道路が破綻したとはメンツ上いえないので、知事は「多額な経費と長い時間を要する」ことを凍結の理由とし、開発局長は「北海道担当部分が未整備では（開発道路の）効果が発揮できない」ことを中止理由にしています。

真実の理由を表に出さないことは歯がゆい思いが残りますが、いずれにしても1984年の着工以来、19年も継続してきた現在進行中の大型公共事業を、建設途上で中止させたことは、画期的なことです。日本一の原始境を誇る日高山脈の心臓部は、無謀な開発の波にさらされることを免れました。もし私たちが疑問の声をあげなければ、開発局と北海道は1998～99年に決めた「事業継続」の路線を走っていたでしょう。

日高横断道路の反対運動をご支援くださった会員の皆様をはじめ、全国の自然愛好家の方々に、「中止」の経緯を報告させていただくとともに、厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。



エゾシカによる植生破壊は誰の責任か？

東京農業大学 北原 理作

前回は個体数管理の目標水準について触れたが、目標水準を上げる場合、もう一つクリアしなければならない課題「樹皮食いなどの植生破壊をどう食い止めるか」がある。シカによる植生破壊は、ホンシュウジカの生息地でも見られ、エゾシカによる樹皮食いを見たことがある方も多いただろう。その他に高山植物や湿原植物も対象となる。道東地域では、阿寒国立公園や知床半島などで植生破壊が著しい。仮にエゾシカが存在するという単純な理由だけで植生破壊が起きるならば、多くのエゾシカが生息していた開拓以前の森林も天然更新が阻害されていたに違いない。また、エゾシカが生息地を破壊することにより、既に自滅していても不思議ではない。

私は、植生破壊の大きな要因は、生息数ではなく生息密度であると考えている。数が増えれば密度も次第に増加するが、数が減っても一定でも、生息環境が破壊されエゾシカが利用できない土地が増えれば、密度は上がる。エゾシカは、開拓による農耕地の拡大や拡大造林政策で栄養状態が向上し、一方で天然林などの越冬地減少を強いられた。さらに人間による開発行為だけでなく、鳥獣保護行政の失敗も一因であろう。冬期の生息密度が高いということは、餌である植物を短期間に食いつぶすことを意味する。ササなどは再生可能だが、木本類は樹皮食いですぐ死滅し、死滅しなくても再生速度が遅い植物は強い採食圧には耐えられない。遊牧民族は、家畜が植生を破壊し尽くす前に移動する。しかし、鳥獣保護の観点から鳥獣保護区や禁猟区を固定すれば、エゾシカは継続的に安全な場所を利用するであろう。残念ながら1ヶ所当たりの鳥獣保護区の面積は狭く、また阿寒湖や摩周湖周辺などの保護区は雪が多く、ササが利用出来ない時には枝や樹皮に対する依存度が高まりやすい。ただし雪が少なくても草本類を食い尽くせば樹皮食いは起きる。

エゾシカ保護管理計画は、生息数を半減することばかりに固執し、肝心の冬期の密度管理に消極的である。エゾシカを分散させなければいけないにもかかわらず、逆に鳥獣保護区への一極集中を加速させているのではと疑いたくなる例が、根室の走古丹などでみられる。たとえ緊急とはいえ、保護区周辺で生息数が多いメスを対象に猟区を拡大し猟期を延ばせば、保護区に分布が偏るのは当然ではないか？単年度ならともかく5年間も継続すれば、尚更密度は偏り植生破壊に拍車がかかる。こうなれば、エゾシカによる植生破壊は人災であると言っても過言ではない。

特定地域の植生破壊を防ぐには、全域可猟もしくは全域禁猟がいかかもしれない。だが、総捕獲頭数規制が出来ない以上、全域可猟は絶滅の危険性を伴い、他の鳥獣にも悪影響を与える。一方捕食者が存在せず、さらに栄養状態が良好で多くの自然死亡が見込めない条件下で、全域禁猟を長期間行えば、爆発的増加を招く。

よって今後は、密度管理や生息地保全を念頭に入れ、地域個体群単位で、猟期や猟区、対象となる性別などを細かく設定するべきであり、段階的に捕獲頭数規制も可能な管理型猟区へ移行することが望まれる。少なくともこれまでの猟期3ヶ月は長すぎると思われ、保護区への一極集中を緩和するためにも、特にメスの猟期は積雪が少ない前半短期集中が望ましいのではなからうか？また、保護区内外の環境収容力に大きな差がある場合も、密度の偏りを助長する可能性が高い。今後環境収容力（現存量や利用可能量）に基づく各保護区の適正密度を算出する必要があるだろう。

(2) シロオビヒメヒカゲの分布拡大と人為的影響について

黒田 哲

シロオビヒメヒカゲは、わが国では北海道だけに産する蝶であり、しかも道内で道南亜種と道東亜種に分けられている数少ない種類の一つである。道内で2つの亜種が区別されている蝶類には、他にペニヒカゲやゴマシジミなど、数種類が知られているが、それらの亜種を研究者によっては認めない場合が多い。しかし、シロオビヒメヒカゲの3亜種は、多くの研究者が認めており、昆虫愛好者である私にも、両者に違いがあると思う。

道南亜種は、生息地が札幌市豊平川上流部の崖地に限られ、定山溪豊平峡以外では記録的に少ない。生息数も少なく、この蝶は、北海道レッドデータブックにおいて「絶滅危惧種」に指定されている。一方、道東亜種は、古い図鑑では珍しい種類とされているが、今ではそれ程少ないとは認識されていない。道東亜種は、日高山脈や夕張山地の山麓部から東側に多く、特に帯広、北見周辺の低山地や平野部の草原では、5月末～7月初の初夏に普通に見られる蝶である。

私が高校生だった1974年6月、先輩の車に乗せてもらい、胆振支庁厚真町を訪れた時、思いがけなくこの蝶に出会うことができた。日高沙流川より東にいたと思っていた蝶（道東亜種）が、勇払原野にいたのである。その後、北海道昆虫同好会会員によって調べられた結果が、1986年と1987年に発表されている。これらの報告では、シロオビヒメヒカゲの食草選択試験の結果、切り開いた道路の法面緑化工事で植えられるケンタッキー・ブルー・グラス（和名ナガハグサ、イネ科草本、よく芝生に使われる北米原産の外来種・帰化種）が好適な食草であることを明らかにした。勇払原野の産は、恐らく、道道59号線の拡幅に伴い、法面に植えられたナガハグサを頼りに、道東亜種が分布を拡大したと推測される。さらに、同じころ道路拡幅工事を進めていた国道274号線でも、同様な現象が認められ、道東亜種は1979年には夕張市十三里、1985年には長沼町幌内神社でも確認され、1986年には、ついに石狩低地帯を超えて恵庭市漁川ダム下の法面でも確認された。

しかしながら、上記の後、札幌近郊の都市部では、すでに道路が整備された場所が多く法面緑化工事があまり行われていないためなのか、あるいは、最近の不景気によって道路工事そのものが少なくなったためなのか、「北広島市で道東亜種が採れたらしい」との不確かな噂があるだけで、道東亜種の札幌侵攻はまだ聞いていない。

ところで、蝶の飼育者の中に「野外へ人為的な放蝶」をする人がいる。その動機として、少なくなった蝶を「同じ種類」であるから野外に放すことは自然の回復に繋がり、「みなを楽しませる、自然を愛する行為」と考えるかららしい。しかも、それが美談であるかのようにマスコミに紹介された記事を目にすることがある。しかし、自然界で何十万年、あるいは何百万年もかけて翅（はね）の微妙な斑紋などが異なるように進化した、定山溪付近に隔離され特化してきた道南亜種は、近い将来、そこに新たに侵入した道東亜種と交わり、あるいはそれに駆逐（くちく）され、消滅する時代が来るかもしれない。その侵入に「人為的な放蝶」が関与するならば、先の自然を愛するという行為は、余りにも「短絡的な判断」としか言いようがなく、自然にとって、非常に迷惑な行為である。場合によっては、それは「遺伝子汚損を行う犯罪行為」と言っても過言ではない。

ちなみに、シロオビヒメヒカゲは、ナガハグサだけではなく、同じイネ科のスズメノカタビラ（人里植物）やオーチャード・グラス（和名カモガヤ、牧草として導入された帰化種）など、さらにはカヤツリグサ科の植物まで広く食草としている。したがって、シロオビヒメヒカゲの道東亜種は、今後、路傍のイネ科草本などを食べながら、自然に分布を広げる可能性がない訳ではない。

法面緑化工事において外来種であるイネ科草本を使用すること、そして放蝶する短絡的な行為は、ともに、シロオビヒメヒカゲの自然の姿を失わせるものであり、それらに対する有効な阻止手段を知らない私にとって、ただ単に、上記の悪い予測が当たらないことを願っている。

(参考文献)

北原 曜・川田光政 1986；シロオビヒメヒカゲの越冬態及び分布拡大について *Jezoensis* No13

北原 曜 1986；シロオビヒメヒカゲの越冬態及び分布拡大について(Ⅱ) *Jezoensis* No14

(札幌市在住)

札幌の大通りは我々のような田舎者が訪れやすい、都会にあって心とむ数少ない場所です。今年の夏には、そこで北海道新聞社主催の「花フェスタ」なる催し物が行われ、偶然見ることになりました。花を販売するイベントのようですが、ほとんどは栽培種が商品として陳列されていました。それはそれなりにきれいで人々の心を打つものではありません。私は個人的にはあまりのめりこめませんが、そうしたガーデニングや花を慈しむ心はあっていいものだと思います。

そうして会場の中で、堂々と高山植物が売られていたことに驚きを隠せませんでした。高山植物は栽培して販売しているのだと、主催者は主張するでしょうがこの態度は決して容認することが出来ません。高山植物に付加価値を与えることになるからです。そしてそれはやがて「盗掘」をも促すことになるからです。

そうした中で、なんと「西別コケモモ」と銘打ったものが売られていたのです。西別岳は私の地元です。早速、北海道新聞社に抗議をすると、それはどこの業者でしたかというような問の抜けた質問が返ってきたのです。これは販売業者の問題ではありません。主催者の姿勢の問題です。名前を隠せばいいのだとか、栽培した物を販売しているのだからということになるでしょう。

さらに、高山の雰囲気を作り出したガーデニングオブジェでは「利尻ヒナゲシ」「夕張アズマギク」「メアカンキンバイ」と、いずれも盗掘を根に持つと思われるものばかり並べられていました。利尻や夕張の漢字を植物名に冠する方法は、植物への無知を表しているばかりか、商品価値を高めようとする行為に他なりません。その他、屋久島など本州方面の山の名前を冠した高山植物も多数販売されていました。

ワシントン条約は、捕獲は勿論のこと規制動物の販売そのものを禁止しています。高山植物も盗掘を禁止するだけでなく、販売も規制しなければこのような無責任で意識のない業者がのさばるばかりです。



主催の北海道最大のメディアである北海道新聞社は、理性の象徴でなくてはならないはずですが。北海道新聞社はこのような、高山植物の盗掘を促すような行為を行っていることを強く認識し、植物の生態と高山植物に無知である自らの対応を猛省し、高山植物の保護に力点を置いていたいただきたいものです。

(根室管内別海町)

北海
各地の

サハリン石油・天然ガス開発とオオワシ

齊藤 慶輔

(社)北海道野生生物保護公社 主任研究員・獣医師)

オオワシ (*Haliaeetus pelagicus*) は翼を広げると2.4mにもなる世界最大級のワシで、世界に約5,000羽程度が生息しているに過ぎないことから絶滅が心配されています。ロシア連邦のオホーツク海沿岸地域で繁殖し、日本にも冬鳥として1,500羽程が渡来します。近年、国内越冬地の中心である北海道において、狩猟時に山野に投棄された獲物に含まれる鉛製の銃弾を口にして多くのオオワシやオジロワシが鉛中毒死し、大きな社会問題になっております。一方、わが国に最も近い繁殖地であるサハリン北東部沿岸では大規模な油田開発が計画・実施されており、その影響が心配されています。オオワシにとっては越冬地では鉛中毒による死亡数の上昇、繁殖地においては繁殖への悪影響が懸念され、絶滅への最短コースを歩み始めてしまっているといえます。

越冬地における鉛中毒問題の解決に向けたさまざまな活動を行うとともに、繁殖地の状況を調べるため、(社)北海道野生生物保護公社では2000年から毎年サハリンを訪れ、オオワシの繁殖状況および行動に関する調査をモスクワ大学と共同で行っております。これまでの調査で、サハリン北東部の湾周辺には約80ペアが繁殖していることがわかっており、200個以上の巣も見つかっています。

サハリン北東部では、現在サハリンⅠ・Ⅱといった大規模な石油天然ガス開発が進行中で、環境への配慮が十分になされていない可能性があるため、多くの専門家から指摘されています。両開発の中心であるチャイボ湾だけでも、約30ペアのオオワシが生息していると推察され、繁殖に関与しない亜成鳥や幼鳥も数多く確認されています。これらのワシは餌のほとんどを湾や河川の魚類に頼っており、特に繁殖中のワシは雛を育てるための重要な餌資源としても活用していることから、開発行為や油流出事故などによる環境破壊は本種の存続に重大な影響を与えることは明らかです。とくに繁殖中のオオワシに対しては、開発行為そのものによる営巣環境や餌環境の破壊、騒音、夜間の照明、人や車両の立ち入りによる繁殖妨害が懸念されます。また、油流出事故による餌資源への影響は、繁殖を行わなかったペア、亜成鳥や幼鳥に対しても大きな影響を及ぼすと考えられます。

これまでサハリン北東部で発信機を装着したワシの約80%もが、冬期の北海道で確認されています。サハリンでの石油・天然ガス開発はオオワシの生息に深刻な影響を与える可能性があり、本種も対象種となっている日露渡り鳥条約に抵触している部分が多く認められます。繁殖地ロシアと越冬地日本の両国が互いに協力し、サハリン開発によるオオワシへの影響を最小限に食い止めるための取り組みを早急に開始する必要があります。

(今回の調査は公益信託経団連自然保護基金の助成を受け実施されました)

2003年度サハリン調査で確認されたオオワシへの影響

サハリンⅠ

- ・チャイボ湾のパイプライン建設ルート上に繁殖中のオオワシの巣を発見
- ・チャイボ湾に建設中の橋から約200mに位置するオオワシの繁殖巣を確認
- ・その他、建設現場付近に多数のオオワシの営巣木が存在することを確認

サハリンⅡ

- ・サハリンⅡ環境影響調査書(EIA)と相違する数のオオワシの繁殖ペアを確認
- ※サハリンⅡ事業社が提示している環境影響調査書では、開発が行われているチャイボ湾において5ペアのオオワシが生息しているとされている。今回、チャイボ湾の一部を調査しただけで、少なくとも15ペアが今年繁殖行動を行ったこと(失敗を含む)を確認した。



パイプライン建設予定地の巣上で親を待つオオワシの雛(チャイボ湾)

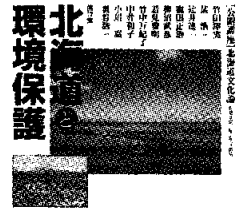
北海道
ニュース

寄贈図書紹介

俵 浩三氏より

「北海道と環境保護」(公開講座)北海道文化論

札幌学院大学生協同組合編 B6版 1,900円



北海道自然保護講演会の御案内

“北海道の公共事業を考える” —大規模林道事業—



講演者 寺島 一 男

日時 2004年1月17日(土) 13:30~

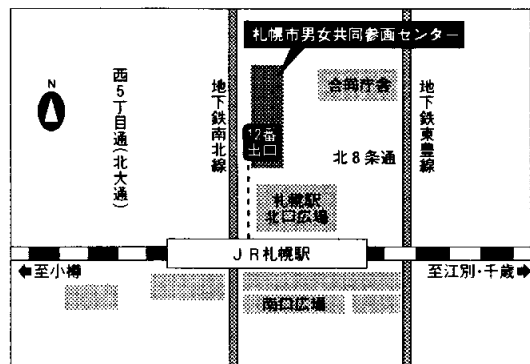
場所 札幌市男女共同参画センター

〒060-0808 札幌市北区北8条西3丁目
札幌エルプラザ内

TEL: 728-1222(代) FAX: 728-1229

交通機関

- JR札幌駅北口より徒歩3分
- 地下鉄南北線さっぽろ駅より徒歩7分、東豊線さっぽろ駅より徒歩10分
(北口地下通路12番出口から建物の中まで直通)



(お越しの際は公共交通機関をご利用ください)

平取ダム現地学習会に参加して(8月9~10日)

市川 利美

台風10号が日高地方を襲った8月9日の夜、平取町で「川のしくみと平取ダム」(協会主催)という学習会に参加していました。

深夜2時。サイレン、そして「二風谷ダムが決壊する恐れがあるので避難するように」というアナウンスに起こされた私たちはすぐホテルから避難。公民館も危険だといわれて、いったんは高台に行ったものの、増水した沙流川を見るために、身の危険を承知で講師の稗田さんたちと堤防に向かいました。堤防の足元まで押し寄せている川の流は暗闇に不気味で、魔物のように恐ろしく見えました。一睡もせず、川の流域を見て回りました。水没したビニールハウスや家々。上流に行くほどに、ゆがんだ橋げたや、樹木ごと崩落した川岸があちこちで見られました。

「ダム」(上流の無数の砂防ダム)は、下流の河床を低下させ、その結果川岸を崩落させるという稗田さんの分析どおりのことが、目の前で大規模に起こっていたのです。リアルな現地学習会でした。

ダムは住民を守ったといえるのでしょうか。二風谷ダムの上流にさらに平取ダムが計画されていますが、ダムがもたらす脅威をもっと率直に見つめていく必要があると思います。

第334回自然観察指導員講習会を終えて(10月3~5日)

常務理事 福地 郁子

10月3日(金)~5日(日)の日程で白老町ポロト湖畔を会場に講習会が開催され、約90名の応募の中から63名が参加しました。参加者の中に3名(男2・女1)聴覚障がいの方が講習を受け、新しく指導員に加わりました。共催の日本自然保護協会から補助があり、幸いにも全面的に北海道ろうあ連盟の手話通訳を受けることが出来ました。また、宿泊施設においてはボランティアの通訳2名も確保でき、全国に先駆け障がい者の方が参加する講習会が北海道において行われたことは意義深いことと思われます。「自然観察から自然保護を」の仲間が増えたことがなによりうれしいです。講習後38名の方が協会へ入会されました。

* お知らせコーナー *

**第10回夏休み
自然観察記録コンクール入賞者
学校一覧**

応募数 218点

審査日 2003年9月26日

審査員 小堀悦治(北海道新聞野生生物基金事務局長)
依 三浩(北海道自然保護協会会長)、
佐藤 謙(同副会長)、伊達佐重(同常務理事)、
福地郁子(同常務理事)、森田正治(同理事)、
後藤言行(同理事)、竹中万紀子(同理事)

〈1・2年生〉

- 金賞** 大木 業緒(札幌市立上野幌東小・2年)
「とうやこでつかまえたエビのかんさつ」
- 銀賞** 小野 萌夏(札幌市立みずほ小・2年)
「だんご虫のかんさつ」
- 銅賞** 青山 舜(芦別市立芦別小・1年)
「えびやさかなをつつたよ」
- 〃 秋葉 颯樹(函館市立東山小・2年)
「はくのかたつむり日記」
- 佳作** 大竹 柊平(札幌市立厚別北小・1年)
「スズムシのようす」
- 〃 早坂 健(札幌市立厚別北小・2年)
「はくのかぶと虫」
- 〃 斉藤 菜希(札幌市立平岸高台小・1年)
「コオロギのだっぴ」
- 〃 松永 渉(帯広市立帯広小・1年)
「サワガニのかんさつ」
- 〃 三橋 朋也(札幌市立和光小・1年)
「くさかげろうの卵からの絵」(5枚)
- 〃 武藤有希乃(芽室町立西小・2年)
「ゆきのうちの近くの川で見つけた生きもの」
- 〃 オリベラ健(札幌市立発寒東小・2年)
「ふしぎ発見～虫こぶ～」
- 〃 恒川 礼奈(教育大付属釧路小・2年)
「かたつむりのエスカーとズー」

〈3・4年生〉

- 金賞** 坂 昌樹(札幌市立緑丘小・4年)
「オオウバユリの観察」
- 銀賞** 笠巻 峻(喜茂別町立喜茂別小・3年)
「ミズナラに来る虫」
- 銅賞** 鈴木 天理(滝川市立東小・4年)
「キャベツをめぐるチョウたち」
- 〃 中村 勇介(札幌市立共栄小・3年)
「自分でみつけた虫の図鑑」

- 佳作** 浦山 悟実(苫小牧市立北星小・3年)
「あお虫日記」
- 〃 佐々木雄大(砂原町立砂原小・3年)
「はじめてかったカブト虫日記」
- 〃 曾根 静香(函館市立北美原小・3年)
「スズムシの観察日記」
- 〃 松永 滉平(帯広市立帯広小・3年)
「えだ豆といんげん豆のかんさつ」
- 〃 奥野 良太(戸井町立戸井西小・3年)
「戸井町オオカマキリはかせになろう」
- 〃 前崎 秀奈(札幌市立北白石小・4年)
「もしゃもしゃの正体」
- 〃 高橋 秀禎(函館市立湯川小・4年)
「アゲハが大きくなるまで」
- 〃 蒲生 早紀(札幌市立手稲中央小・4年)
「キアゲハの観察」

〈5・6年生〉

- 金賞** 秋葉 涼樹(函館市立東山小・5年)
「クワガタ採り」
- 銀賞** 浜本 健汰(苫小牧市立豊川小・5年)
「苫小牧の蝶調べ」
- 銅賞** 鈴木 生(栗山町立栗山小・5年)
「昆虫たちの足」(作文添付)
- 〃 小上 拓也(札幌市立あいの里小・6年)
「テントウムシの観察」
- 佳作** 菅原 涼平(江別市立大麻西小・5年)
「近所の鳥調べ」
- 〃 オリベラ英理央(札幌市立発寒東小・5年)
「タンポポの観察」
- 〃 小松 萌香(苫小牧市立北星小・5年)
「カブトムシ成長記録」
- 〃 山本 晃平(阿寒町立阿寒湖小・5年)
「ボッケ」作文
- 〃 久末 康太(阿寒町立阿寒湖小・5年)
「ボッケの森」
- 〃 鹿野 秀和(旭川市立豊岡小・6年)
「はくの珍種標本コレクション」
- 〃 岩淵 朝子(芦別市立西芦別小・6年)
「ヒマワリ畑」
- 〃 櫻井 清香(芦別市立西芦別小・6年)
「カサブランカ」

〈学校賞〉

阿寒町立阿寒湖小学校
札幌市立厚別北小学校
函館市立東山小学校

活動日誌

- 2003年7月
 - 23日 第2回拡大常務理事会
- 2003年8月
 - 9~10日 平取ダム現地学習会&予定地視察
 - 23日 第2回理事会
- 2003年9月
 - 16日 夏休み自然観察記録コンクール締切り
 - 19日 第3回拡大常務理事会
 - 26日 夏休み自然観察記録コンクール審査
- 2003年10月
 - 3~5日 第334回自然観察指導員講習会(白老)
 - 14日 大規模林道期中評価委員会地元意見聴取会陳述(静内)
 - 18~19日 大規模林道「置戸・陸別」「丸瀬布・白滝」等現地視察・交流会
 - 22日 第4回拡大常務理事会
 - 29日 南幌中学2年生一総合学習で来所

新会員紹介

- 2003.5.18~2003.10.5まで
- 【A会員】
- | | | |
|-------|-------|-------|
| 神谷健士郎 | 茂野 健 | 植田 和俊 |
| 佐々木克之 | 深尾 和幸 | 加我 秀一 |
| 中山 和恵 | 池田 政明 | 小倉 博昭 |
| 神能 俊行 | 川北 昭 | 川北美由紀 |
| 広瀬 彩奈 | 絹川 富往 | 植野 真樹 |
| 服巻 滋之 | 矢部 志朗 | 森本 夏彦 |
| 三浦 潤一 | 松本 英宣 | 榑 勇 |
| 小坂 克巳 | 東田 行弘 | 久保田勝彦 |
| 上田 貴夫 | 西島 徹 | 佐藤 雅彦 |
| 酒井 一夫 | 小林明日香 | 高林三知子 |
| 大口 真治 | 中田 純哉 | 西 正志 |
| 近下 勝美 | 盛 悦子 | 高城 健治 |
| 飯田 弘己 | 飯田真佐子 | 中村 修一 |
| 中村 典代 | 大喜多弘隆 | 羽賀 実 |
| 中西 基裕 | | |

要望書など

- 2003年9月3日
 - 開発道路として整備中の道道に関する基本的情報の公開を求める要望書
- 2003年9月29日
 - 恵庭岳滑降コースの跡地復原を「従来の林相」へ導くため、適切な植生管理の実施を求める要望書
- 2003年10月14日
 - 大規模林道「平取・えりも線」の「静内・三石区間」と「様似・えりも区間」に関する意見書

協会のホームページ

<http://www.jade.dti.ne.jp/~nchokkai/>

協会では、会誌やNC(会報)の他に、ホームページでの活動報告・意見募集も行っておりますので、ぜひご覧になってください。会員の皆さんには、協会宛に直接の手紙やホームページ上の意見欄にご意見を寄せていただくことを願っております。

会費納入のお願い

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいますようお願いいたします。

個人A会員	4,000円
個人B会員	2,000円
(A会員と同一世帯の会員)	
学生会員	2,000円
団体会員 111	15,000円

<納入口座>

郵便振替口座 02710-7-4055

北洋銀行大通支店(普通)	0017259
北海道銀行本店(普通)	0101444
札幌銀行本店(普通)	418891

<口座名>

社団法人 北海道自然保護協会

※ この紙は再生紙を使用しています。

